

「雲カル・東吹」の二人に聞いたレジェール活用法



僕たちの中でレジェールは
もう葦のリードを超えている！

日本のサクソフォン奏者に逸早く注目されたレジェール・リード。中でも雲井雅人サックス四重奏団のメンバーが使い出したのは早く、それぞれにレジェールを使いこなして来た。

記事協賛：株式会社グローバル



——西尾さんはかなり早くからレジェールを使い出したそうですね。

西尾 日本に試作が入って来たとき、20年ほど前かな……東京吹奏楽団の関係で（レジェールの輸入元グローバルは同団の協賛企業）バリトン用のサンプルを戴いたんですが、プラスチックリードにまだ先入観があったので「どうせ使えないだろう」と放ってあったんです。

でも、その時ちょうど雲カル（雲井雅人サックス四重奏団）がマスカラの大変な曲をやっていて、爆音から超弱音が要求される中で、それに対応できるリード選別に苦勞してたんですよ。100枚近く選んでも良いものが見つからず、マウスピースを替えた方がいいかなと思っていた時に、ふと思い出してレジェールのサンプルを吹いてみたら、「あれ、これいいかも」と。それでこっそりハーサル

で使ってみたら、雲井さんに「今日、調子いいんじゃない？」といわれ、「もしかしらいいけるかも？」と思ったのが最初です。

——本番でもすぐに使い出した？

西尾 いえ、最初は葦のリードを選ぶ時に、最低でもレジェールよりいいやつを選ぼうという基準のように使っていた。でもそのうちレジェールが一番いいという状態になり、本番でも使うようになりました。

ただ、当時は「シグネチャー」がまだ出てなかったんですね。まだいろいろ問題を感じて、マウスピースへのリードの付け方をずらすなどして対応してたんですが、シグネチャーになって材質などが

一気に進歩し、アルトやテナーでもレジェールを使うようになった。

——佐藤さんも同じ頃にレジェールを？

佐藤 僕はもうちょっと遅く、使い出したのはシグネチャー以降です。シグネチャー以前のものはアルトにはどうにも難しかった。シグネチャーが出てからレジェールに替えました。

テナーもレジェール。テナーは仕事で年に数回吹くくらいですが、レジェールを付けっぱなしにしてあります。葦だとリードが変質するので考えられないけれど、レジェールだといつでもスタンバイOK。アルトのジャズ用マウスピースで「宝島」のソロを大ホールで吹くような時もシグネチャーの2番を付けています。

——葦のリードからシグネチャーに移るのは問題なく？

佐藤 問題は全くなかったですね。それまでのレジェールとは全く違うものが出て来たと驚かされました。

——シグネチャーはそれまでのレジェールと何が違うと？

西尾 メーカーの人に聞いた話では、何か繊維質のもの……それが何かはトップシークレットで教えてくれませんでしたけども、そうしたものを混ぜて振動の仕方を葦と全く同じにしたのだとか。だから、シグネチャーは吹き心地も音も、葦とほとんど変わらないですね。

——雲カルの皆さんの影響もあってか、日本でのレジェールの普及はクラリネット

シグネチャーで材質が一気に進歩し アルトやテナーでもレジェールを……

サクソフォン奏者

西尾 貴浩

Takahiro Nishio

サクソフォン奏者

佐藤 渉

Wataru Sato

トよりもサクソスの方が早かったですね。
佐藤 僕が知る限り、アメリカよりも日本の方がレジェールを使うサクソフォン奏者は多いように思います。アメリカは広い国なので、プレイヤーや学生どうしが交流しあうことが日本よりも少ないのと、主立ったプレイヤーや先生たちが大抵どこかのリードメーカーと契約してレジェールを使いづらいということも関係あるのかも知れません。

アメリカンカットの魅力

—— 西尾さんのリードケースには葦のリードも入ってますね。

西尾 アルトでは葦を使うこともありま
す。葦のリードの扱い方や育
て方も忘れないようにしてお
きたいので。

佐藤 僕はもうほぼ100%
レジェール。

西尾 ただ、レジェールから
アメリカンカットが出て、最近はもうこ
れでいいかなと思っている。僕が今使っ
ているセルマーの「コンセプト」という
マウスピースと相性がすごくいいんで
す。

—— アメリカンカットは何が違うので
すか？

西尾 材質は一緒ですけど、カット面の
中央を背骨のように高くして、そこから
先端に向けて薄くなっています。先端を
今までよりも薄くする技術が出来たよ
うで、通常のシグネチャーよりも先端が
薄い。このため、吹き心地は軽めですが、
音の芯がわりとはっきり出ます。開発に
7年くらいかかったと聞いてます。

—— 佐藤さんもアメリカンカットを？
佐藤 僕は混ぜて使ってます。マウスピー

アメリカンカットは 低音域で音の充実感が増す。



雲井雅人サクソス四重奏団では佐藤さん(右)がアルトを、西尾さんがバリトンを担当。

Saxophone

西尾貴浩 Takahiro Nishio

北海道弟子屈町生まれ。美幌中学校で吹奏楽部入部。留辺蘂中学校・北見北斗高等学校・愛知県立芸術大学卒業。東京コンセルヴァトアール尚美ディプロマコース修了。メンバーである「フェロー・サクソフォン・カルテット」が青山財団より「バロックザール賞」を受賞。東京文化会館新進音楽家デビュー・コンサート・オーディションに合格。第3回アドルフ・サクソス国際コンクールにおいてセミファイナリスト。2000年より「雲井雅人サクソス四重奏団」のメンバーとして国内外のコンサートに出演。これまでに7枚のCDをリリース。作曲家、久石譲のレコーディングや全国ツアーに数多く参加。指揮者の小澤征爾を総監督とする「サイトウキネン・フェスティバル」に2012年より参加。現在、東京エリアを中心にソロ、室内楽、吹奏楽、オーケストラなどで演奏活動を行っている。サクソフォンを雲井雅人氏、室内楽を菅原睦、中川良平、村田四郎、服部吉之、服部真理子の各氏に師事。現在、東京吹奏楽団団員、雲井雅人サクソス四重奏団、フェロー・サクソフォン・カルテット、銀河管弦楽団各メンバー。尚美学園大学、名古屋芸術大学非常勤講師。

Saxophone

佐藤 渉 Wataru Sato

1975年東京都生まれ。1994年シンシナティ音楽院入学。1996年北アメリカ・サクソフォン・コンペティション第3位入賞。在学中コンチェルト・コンペティションに2度優勝し、同校フィルハーモニック・オーケストラおよびウィンド・シンフォニーと共演。1998年同校コンテンポラリー・ミュージック・アンサンブルとボルトガル・ツアーを行う。同年ノースウエスタン大学大学院に入学。在学中コンチェルト・コンペティションに優勝し、同校フィルハーモニック・オーケストラと共演、CD「The Orpheus Oracle」(VMM3046)にコンチェルトのソリストとして参加。1999年、同大学院修了。サクソフォンを彦坂眞一郎、須川展也、リック・ヴァンメーター、フレデリック・ヘムケ、雲井雅人の各氏に師事。ソロ、室内楽、オーケストラなどで演奏活動を行うほか、雲井雅人サクソス四重奏団のメンバーとして7枚のCDをリリース。同四重奏団では上海ツアー、アメリカツアーを成功させた他、米軍海軍バンドとソリストとして共演。久石譲氏CD「Minimalism II」やヤマハ教材録音などスタジオ録音にも参加している。2011年ソロCD「Saxophone Recital」をリリース。現在、東京吹奏楽団団員、雲井雅人サクソス四重奏団メンバー、桜美林大学非常勤講師、国立音楽大学附属高等学校非常勤講師。

スはセルマーの「180」。
西尾 「コンセプト」は音がすごく柔らかいマウスピースですが、抵抗があつて、ともすると音がこもり気味になる。それで僕はアメリカンカットのような軽いリードでバランスを取っています。通常のシグネチャーでも吹けるけれど、葦のリードと取っ替え引っ替えして試行錯誤していた時にアメリカンカットを試したら、相性抜群なことが分かった。ただ、アメリカンカットは僕のテナーのマウスピースと相性が悪く、テナーでは普通のシグネチャーを使っています。
佐藤 アメリカンカットはハート部分が厚に残っているの、低音域をドー



アメリカンカットの新しいパッケージ。

奏法の改善もレジェールだからこそ出来たことかも知れない。

ンと吹けますね。音の充実感が増す。カルテットのアルトや吹奏楽の2番アルトはテナーとのつながりが重要で、低音域が細かったり詰まった感じになると音がブレンドしなくなりですが、アメリカンカットを使うとしっくり来ます。レジェール全体でも低音は充実していると思いますけど、アメリカンカットは特にいいですね。

—— 番手（硬さ）はどんなものをお使いですか。
佐藤 セルマーの180に対して、僕は3番くらいの軽めなもの。しかもリードを少し上にセットしています。

—— なぜですか？
佐藤 ジャストの位置にセットするより、軽めのリードを上の方にセットした方が好きなんです。

西尾 僕もそう。重めのリードをちょっと下げることもある。そうしたリードのセッティングはバリトンなどでも小まめに調整しますね。

—— クラリネットの粟生田（直樹）さんが、「レジェールに合うマウスピースと合わないマウスピースがあると思う」と本誌489号で話しています。

西尾 ティップの開きが狭いと、もしかしたらレジェールはあまり合わないかも知れないですね。セルマーの170とか。佐藤 170に合わせている人はあまりいないかも。

西尾 開きが広めのマウスピースの方が合いやすいかも知れない。それと、レジェールは大きな楽器なほど相性がよいと思う。

自分の奏法の指針となるリード

—— アンブシユアや吹き方との相性なども感じますか？
佐藤 今のレジェールは、タイトなアンブシユアで吹く人たちでも使えるものになつて来ていると思います。

—— レジェールは葦のリードに比べて落ち着いた音になる分、高次倍音が少なめに聞こえるという人もいます。

西尾 そのために僕は、あえて倍音を多く含む音の出し方を練習するなど、より柔軟な奏法を身に付けるよう変えて来ました。結果として、葦のリードでもより柔軟な奏法で演奏できるようになった。こうした奏法の改善も、レジェールだからこそ出来たことかも知れないですね。

葦の場合は1枚1枚が違うので、リードによって吹き方が変わってしまう、奏法を確立させるのは難しかった。レジェールだと、少なくともリードと自分の関係は、フルートや金管楽器と同じように、すべて自分のせいに出来るんですよ。これを知った時は、逆にすごく嬉しかったですよ。これはレジェールのメリットの一つだと思います。

レジェールを使うことで自分の奏法をいろいろ研究できたおかげで、今は自分にとって一番良い吹き方というのを見つけてられています。その吹き方で葦のリードを吹くと、前に分からなかった葦の良し悪しもよく分かるようになった。

—— 柔軟性のある吹き方というのは、具体的にどういったことですか。
西尾 例えば、ジャズの人たちの吹き方をいろいろ研究し、下唇のクッションをリードにしっかりと柔らかく当てることなどは非常に参考になりましたね。そうすると倍音が増して音も良くなります。

倍音（オーバートーン）練習もたくさんやりました。口だけで倍音列を簡単に出来るようになると、葦のリードでもそのリードに合わせて吹けるようになる。



佐藤さんは薄めのレジェールを先端をやや上へ上げてセットしている。



佐藤さんのリードケース。シグネチャーの硬さ表示は以前のシールから印刷に変わった。

結局、葦でもレジェールでもどちらでも吹けるようになるんです。面白いもので、レジェールで練習していなかったら、そうはならなかったと思います。

妥協は一切していない

——葦のリードでベストの1枚が見つかったとして、それでもレジェールを使いますか？

西尾 葦のそんなリードは何十枚に1枚あるかないかだと思うけれど、もしあったとしても、良い状態がどれだけ続くのか？ 20〜30分なのか1時間持つのか？ ましてや2時間のコンサートをキープ出来るのか？ 翌日も使えるのか？ など考えるのと、多分、怪しいと思いますね。

——つまり、妥協してレジェールを使っているわけではないと。今までは「レジェールはベストではなくても、常に良い葦のリー

ドの70〜80%のレベルを維持できるから使っている」と言う人が多かったように思います。

西尾 僕も最初は妥協から始まったんですが、今は一番良いリードを探して、最後に選んでいるのがレジェールですね。

佐藤 僕も妥協はまったくしていません。レジェールにも1枚1枚若干の振れ幅がありますけど、本当に自分に合ったものだと、もう何年使っているのか分からなくなるほどずっと長く使っています。実際、このリードケースの中にも数年単位で使っているのが何枚か混じっています。

先ほどの西尾さんの話にもありましたけど、リードに寄りかかった奏法、ぐつと押し込んだような感じで吹いていると、レジェールも葦と同じようにへたって行きますね。音がぐぐもって、高次倍音が足りないような音になっていく。そうではなく、レジェールを素直に鳴らすような吹き方をしていると、リードに過度の圧をかけずに響かせる正しい奏法に導か

れると思います。

西尾 初心者でもレジェールは普通によく吹けるリードですが、1ヶ月後くらいしてその子のリードを見ると、無数にヒビが入っていたりする。たぶん、噛んじゃって割れちゃったんですよ。噛みすぎると先端が割れたりします。

佐藤 マウスピースに付けたまま、先端をひっかけて欠けちゃったりするケースもありますね。リードケースに収める時の扱いも注意

このリードケースの中にも数年単位で使っているものが何枚か……



レジェールはケーンのリードよりも肉厚が薄めなのでケースの中で先端が前に飛び出る危険がある。

しないと、先端を損傷してしまうことがある（写真左）。

西尾 レジェールは、気温が高いとやや柔らかめに感じたりすることはあります。それと、「へたったかな？」と思ってリードを平らなところに置いて見ると、先端がちよっと曲がったりするんですが、数週間程度で元に戻るんですよ。リードを休ませて久しぶりに吹くと、元に戻っている。これは凄いなと思った。メーカー側もオフィシャルに「形状記憶の特性がある」と言っていますね。

——リガチャーの締め方などは？

西尾 へたらないからと

言って、別にリガチャーを緩く締めて吹いているわけじゃありません。特にバリトンなどでは、僕はかなりきつく締めます。逆にレジェールの場合、リガチャーを緩く締めるとぐらつきやすいかも知れない。特に革のリガチャーはしっかり締めた方がいいですね。テナーやバリトンでは特にそうです。

—— いろいろ伺って来ましたが、最後にレジェールの魅力をまとめると?

西尾 まずは、リードにバラツキがないこと。レジェールもかつては少しバラツキがありましたけど、最近は全然なくなりました。

佐藤 本当にそうですね。

西尾 レジェールには「はずれ」というのがない。

僕はソプラノからバリトンまで全部吹くので、それを全部葦のリードで対応しようと思うと、リード選びだけで大変な作

リードが乾いて変質しないので 持ち替えの時の安心感が全然違う。

業になったんですけど、レジェールにしたらからそうした苦労はほとんど無くなった。「バラツキがない」ということは、我々にはやはり大きなメリットです。

もう一つ、リードが乾いて変質したりしないので、持ち替えの時の安心感が全然違います。楽器に付けっぱなしのままでもすぐに吹ける。吹く前に紙めることすらしない(笑)。昔だったらこれは考えられなかったことです。

それと、レジェールでは弱音が抜群に吹きやすいこと。弱音がとても楽にコントロールできる。逆にパワーという点で

は、葦のリードの方にいささか分があるかも知れませんが。

佐藤 強く吹いたときに、レジェールの場合は音のえぐみというか、音に付随するノイズのようなものが乗りにくいかも知れない。

西尾 音がきれい過ぎて困っちゃうことはありますね。贅沢な悩みなんですけどね(笑)。その分、息の音を混ぜたり、雑味を加えるような研究

もしました。ただ、そうしたコントローラもレジェールのおかげで身に付けることが出来たと思っています。

東京吹奏楽団の次回の定期に期待!

—— ところで、お二人は雲カルだけでなく、東京吹奏楽団でも一緒に活動されています。東吹のサクソフォン・セクションでは昔から錚々たる人たちが活躍して来られましたね。

佐藤 はい。僕自身は池上(政人)さんの下でセカンドを吹かせてもらったりしたことがよくありましたが、上の世代から脈々と受け継がれて来た東吹の伝統みたいなものを強く感じていました。

活動は基本的に、ポピュラー寄りのコンサートと、シリア

スな作品を手がける定期演奏会の二つを軸に行っています。定期演奏会では前回「オール・リード」のプログラムを組みましたが、今度の9月11日の定期(東京芸術劇場)は「オール・マスランカ」のプログラム。その中で、われわれ雲井カルテットが唯一まだ演奏していないマスランカの「サクソフォン四重奏のためのコンチェルト」を雲カルと東京吹奏楽団が協演しますので、ぜひ注目ください! **西尾** 冒頭からすごいエネルギーをもった作品!

佐藤 プログラムは1曲目がマスランカの「テストメント」、2曲目が「サクソフォン四重奏のためのコンチェルト」、最後がシンフォニー第4番。指揮は松井慶太さん。かなり熱いコンサートになると思いますので、ぜひ多くの方に聴いて頂ければと思います。



西尾さんのリードケース。左の2枚はバリトン用。アルト用はアメリカンカットがほとんど。

